箱根七湯栞　一

ル 4
1124
1

門 ル 4
號
巻

筥根七湯栞巻之一

叙

東都　文牕主人校正
弄花山人纂緝

和漢の碩儒名醫温泉の理を説き能をあげつらふ
理ハ和漢同しといへとも能ハ和ハより異なり其理
ハ論に宜なる能ハ不窮こともあるべし其能を送る
りの知ずんハ有べからず乞ま一家に記しとゞむる
年ありし文化八のとし友人弄花と共に卯の花の雪を
袖うち拂ひ杖を西南にむかはしめけ筥根の出湯
を探る時友のさそひめ螢山の翠をうかゞひしりて

呂
門
1124
巻 1

眼の欲を極め子門の水清く流れて心の塵を洗ふ人
歎くべきは手弱女の眉斧に似たるたまのをも伐唐く三
弦の音怨みとて小て腰をなるべし世はひを治し
て却て病を流して身をめつる源を忘れて之を
尉る未だ楽しく満ときはなしや於此血ち濆を発し
七湯の効験より病の應変治後の禁忌且地産の廣
棲名勝旧蹟珍しきものまでを載せて後人の文を
抛つてその是非は書樹の序を予に譲りて於
詳らかならんは是を抛つて志すべし

文聰主人志ス

自序

夫陽氣は火氣なり金石樹中に於て敲き彼を撃て
血然として火出る所なし是に於て汝と思ふべき
豈土中陽氣積聚して火を生ずるの理なからんや世人昭
に聴さるなりと其あるを所を忘るべきなるべし蓋陽氣
の土中にあるや湯となりの伏するの瀬ありしも是非を
土中の火といひ又火井といふ所謂越後妙法寺村の
火越中立山の火峯之其大勢あり於熾せしめて化生
するものは式は硫黄となり式は礬石となる土中の水
脉を上と為すは此これは火小薫蒸せしめて自ら

温泉と云ハ效アリ湯出ますところの温泉も又名効を
あらハし験ある故に七湯艺猶唐の陳蔵器の
著はす本草に始て温泉の効験を説き張華の博
物志胡か湊穏叢話揚升庵か丹鉛録謝肇淛か
五雑俎の類辨に要するにや皇朝の人病を治するに叙
切なれば爰に一とせ相州箱根の七湯を探らんとて
友人文窓主人を率ゐてまづ湯本より先つ
其夜浴房に寄宿はいとさへ箱根路の私何枕と
歆ニハ早川の水岩を噬く喧しく彭と四ふれハ
庭上の楓窓を抱くもりしをみなる囲碁の響ハ

折端をつくし玉つよ杖をとゞえ遠なる三法の書を
故人を慕ひ椿窓の心をなぐさめ世香を合せ茶を
闘し詩を誦し沸を弄し楽を尽すにありしに
岩堂従来彼藝の友ならすそれより日坂連らん
よりハさらに申ゞゐ紀両吉之のまゝ両呉赤尾で史らら
次第に七湯の地をめぐり物尋ぬべき支度をなしけれハ
一夜二更に地を宿り意し図を模し詞ゑかれて
存稿等を附し号て七湯の葉と唱ふるのハ
さんぬ人の心能く花遊すところなれば拙筆をとりてこれ
序

文化八丁未の初夏

弄花山人しるす

七湯栞

一の巻目次

一温泉湧出の濫觴
一出湯の効験
一箱根七湯の地名
一入方用捨の次第
一熊野権現之説
一箱根七湯全圖
一同名所四十九ヶ所の名
一三枚橋の図 並早川三枚橋の説
一滝坂越之図

二之巻目

湯本の部

一湯宿並効験
一湯本之記 並全図
一早雲寺事蹟
一惣湯の図
一宗祇法師の事

三の巻目

塔の澤之部

一 湯宿並効験
一 塔沢の記並全図
一 玉の緒滝湯の由来並畧図
一 明人舜水の墨跡写

四之巻〻目

堂ヶ嶋の部

一 湯宿並効験
一 夢窓国師の傳
一 堂ヶ島全圖 並八景詩哥
一 同白糸の滝図
一 同所古碑之写

五之巻

宮下の部

一 湯宿並効験
一 宮の下全図
一 三日月の湯之記
一 白糸瀑布相海遠望の畧
一 同八景の詩歌
一 滝湯拭りゆりの文 附湯宿所蔵大閤制札之写

六之巻

底倉の部

一湯宿効験並全図

一石風呂の譜並全図

一痔漏灸治図並灸治用法

一小地獄嵓の図並古哥及鷹取ヶ古事

七の巻

木賀之部

一湯宿効験並全図

一木賀善司ヶ事

一八景古碑等

一八重山公時山の図並足柄神社の説

一同古哥

八の巻

蘆の湯部

一湯宿効験並全図 附達广湯の事

一円湯風呂の図

一笛塚の事蹟

一土肥河内土肥畑舊地並古哥古碑ホ

一明礬山ヨリ相模灘眺望図

一家々所持墨跡寫

九之巻

一曽我兄弟塚の図
一二十五菩薩の図
一多田満仲の墓
一元賽河原の全図
一同地蔵形石燈籠の図
一應長の碑寫並八百比丘尼の墓
一五条石
一湖水眺望の図

十之巻

一箱根権現畧縁記 並宝物等
一同湖水並古哥紀行
一同産物図考
一七湯價附
一姥子の湯
一四季勘考

目録畢

凡例

一此書をあまねくうつして當く按るへきハ古来の書を求むといへとも
文にしるし書とまへなし只口碑小緒の百七人の俚談を
こと〳〵く采りて以て前後十巻となす正しからぬ
説も多かるへし因て見聞することをとりて圖をなし
文をつくる見ん人是をおもへ

一名所部類并杭木ともに六の地の此名坂の名あまた
いまたとも湯の名の小用たけれハ省ての略ス

一圖中四季の風景あるハ画のつゐなくして地境の佳景
ところ〳〵にハ見るといへ共文を補ん為に記す

一湯ニ療せし病名癒風をたまはり病癖を困む
かしく耳をて志あるへしハ云へと見女子の見易からんこと
を先たる案

一湯宿のかゝり風呂のさゝゐこしゐに家风といへとも相宿
の手入つくろひまでこゝとゝのひの遠慮る事あるべし
一世俗のならひ湯治とさへいへば費へ多かり容易ならざる
さるゆゑにおのづから浴湯すべき病者も十ゟ八九はその
事を止りる益の薬剤ゟ日数を送るもの多し故ゟ
この巻ゟ一廻浴するまでは雑費いくばくと詳ゟ志るし尚
人馬賃銭小遣ひまでを書加へて費のあらましをしらしむる事を
志るしむ
一湯宿の用事何くれとなし使まはりのものを湯女とよび
てたゞまへあたりのものゝやうにおもひ人々も遊ぶともなし左
にはあらじ昔ゟ古の土地ゟてはあらず質朴なる
風俗なりさまでとその俗にうつせば風情をうしなふ
故ゟ此のかたゝゆひゟ画しなり

一七湯毎の地景古蹟土産物大概は書のことはりといへども
まゝ遺漏も多かるべし猶追々加ふべし

箱根七湯栞巻之一

温泉濫觴

凡温泉ゟ浸りて病を治するものは千早振神代のむかし
天孫いまだ降臨ましまさゞる時大己貴命少名彦命と
同じく此豊葦原中津国を鎮めさせたまひし御時
民の夭折を哀みて医薬禁厭温泉の法をさだめおく
其病苦をすくひたまふ時ゟ大己貴命御兄弟例ならず
さるによりて少名彦命を温泉ゟ浴せしめ給ひ
りまへは其の御病悩即時に平癒ありし是より

二神海内を巡行し給ひ大地のよろしき所々に
温泉をまうけ給ひし事旧記に歴然たり舒明
孝徳の二帝も温泉に浴し給ひ御悩を療し
給ひ其外代々の人々入湯して病をのぞきし例
挙てかぞへがたし唐土にても秦の始皇帝
瘡腫のうれひありし時驪山の温泉に浴されしハ
その病頓に愈たる事三秦記に見へたり

出湯のいさほし

夫温泉ハ天地自然の理にして陰陽交合し水
火妙合して温泉となる故に是に浴すれハ凡
そもそも人の肌體腰膝表裏関節に貫徹し陽
気を宣通し痼病を化導し経絡を利し気血を
透し邪毒を排托せしむるのみならず音律其物を
うるほし時気の物をもしりぞけ自然として精を益し
滞を解き寒を除き湿を去るなり皆温泉の徳なり
別て婦人血積瘀血経行不順の証又ハ帯下腰冷下部
一切の病によろし

入方用捨の次第

箱根七湯ハ悉く効験正しくいろいろ疾病に同しからず微
名異なりといへとも大底ハ老少男女を論せず悉く生を主
とし腎を補益の温湯にして腎を補ひ筋骨肌膚
を固し脾胃をととのへ食をすゝめ元気津液をまし又
臓をあたゝめ元気百病に痼癖変して虚疾の病と
いへとも悉く志るしありよく二十湯宿に薬揃て病ふ
痼して浴すへし湯宿文古跡あり博覧の医者
いへとも温泉の製ハ利なり先川浴せんとして湯槽

に随ましハそれの手拭ひをもちて湯壺のきハを洗ひ
温気を布へ腰かけ右足ハと湯壺の中へ浸しながら
湯をすくり浴ひ両足を洗ひいかにも気を平らかにして
夫より両肩背中腰の辺を何遍もそゝぎかけ自
然と熱身あたゝまりて後静かに入るべし尤肩の出ぬ程に
いたり肩むね附ゟ上気ハ男女共さうさむをいたし
手足をのばしそろそろ指のさきまでも湯のめぐるやうに
入べし上気をしりぞけ足をくりて湯にひたし
ものなり是要用なり却て上気してあしかく
して熱身自然とほてまり遂ふりに思ひ付静か
にいたすべし故久しく浴すれバ津液燥して害を
なせり但し入湯ハ一日に二三度より六七度までハくるしからず
かし浴むなれバ湯より上りていさゝか血をさます

さるうちに又いつも人逆上してあしく此由意にまかすむ
時ハ手拭を巻て浴しそのまゝさする時ハ又合せて入べし
已に気升りて冷き後ハ血もうけて気血和せざれば
湯の気入り逆上なし斧ぬべし　扨湯より上りて
風にあたるべからず是表虚しけ風寒に傷られ易き
ゆ故なりたとへ暑さ麻ありとも小衾をかつぐべし　又忌ある
る人婦人経水中ハ勿論其に様もあらん人ハ入るべからず
押て浴すれバやがて毛穴も閉て汗清まらず
出湯血ち渇り湯と変する也又現にも見し　西方より
是まで霊湯の奇特なるべし　親を思ふ亀
或るなり出湯浴人温泉とおろそかにして却る
書生の説を失て彼の備前の河合章堯といへる
人の湯の記にも凡四民とも湯むべきハ時そのと貴人

のちまた此蒼生をおろそかにたまはす濟ましまつらさ
ましそひとへに温泉ハ神のごとく君のごとくつゝしミ
敬ひて病を除く術をおしへ給ひしはありがたき教
なりけるや

熊野権現の説

弘仁神祇式曰相模國足柄郡熊野神社三神宝亀二年
道臣直奉此神かくいふときハ其来る所謂たしかなれ
とも七湯ある地にこれ皆勧請して崇信まつれハ所
まことにおもひよらさる處也 又摂州有馬ニ湯山権現
ありて是有馬山の地主権現のよし
延喜式神名帳曰 摂津国有馬郡 三座 有馬神社素盞雄尊ヲ祭ル
智神社大己貴尊ヲ祭ル 湯泉神社少名彦命ヲマツル 已上有馬山湯山権現ナ
祭る所の三座の神社なり

按するに箱根山の熊野権現も古しへハ三座なりしと云有へき
の湯山権現の湯山と熊野の別道へハこれ有り国と且ひやの
きふまりし湯ある場所なる社ともふけしことおもひ
さまことにその中にも道臣直の観請なしもあらんかまことに
文化八年まて千余年なりし事なれハ其志るしなし

相模國風土記曰
相模國 上管八郡 四方三日 地厚キ豆一丈 生産肥 山浅くして
枚木少ク 海藻魚鼈多シ 中下国 田數一万千四百卅六
町 知行高十九万四千二百石也 足柄上 足柄下 愛甲 高
座 鎌倉 三浦 太住 陶綾 江之島
同霊場部曰
萬壽二年 秋足柄麓鳴動シ飛石起沙コト三十余日
樵夫獵男當之蒙疵數百人 或夜有ニ白衣老翁其地其
郷ニ告テ有霊場 病夫至其地而浴其湯 經四五日

病夫各得快験焉爾来歴代浴此湯無不治病痾云々万
壽二年より今年迄七百八十年におよふこの湯は
因て来ること久し　又一休禅師此地に至りてよめし
時の詩有

遠携笞錫拜三神　幕下一揓拂棘榛
仙跡千年名未朽　妙湯涌出救病民

筥根山　景物　櫻　まつれ　とりし　時鳥　葛　广金
竹　玉簾　山小菱

とりこゝ筥根の山よ明はなれ二よりこゝろ　俊綱
逢かせしまに
語幸や岩ふきたゝてこゑね山　其角
筥根ゆきまいらす霧のあつくころ　東吉
有明くまてねいりての庵かな　長花

相模國足柄郡筥根山中湯本　塔ノ沢　堂ヶ島　宮ノ下
底倉　木賀　芦之湯七湯順路本街道小田原驛より
畑通り湖水ハいつれも山中名所旧跡つゝきより
志ゝ志んにふえこゝに載あるもの有探

七湯地形全圖

湖水
別當
元箱根
権現道
古湯道
芦ノ湯
駒ヶ嶽
冠ヶ嶽
地ゴク山
宮城野
木賀
二子山
鷹巣山
底倉
宮ノ下
堂ヶ嶋
大平臺
塔ノ澤
湯本山
湯本
早雲寺
畑宿
川端
石カケ山

小田原の出口右の方に三浦荒次郎が霊を祭りし
居神明神社あり又浜辺のかたに松田尾
張守が屋敷の跡あり小田原右大の辺らしき人乃
彼りとゐるものし同 浜の有木の文と云ふ所に
かまの跡より却人のこの所に流れ着きけりしを
所の人崇めて裹をしよりしの跡に木を植し
まりの名とそまゐる万松院といへり 縁石とて寺
石あり右の杉山を豊臣太閤陣所の石かけ也といへ
古るとも
まだ笠懸け春後十万迭風のまゝ残れり早川象が鼻
風祭長興山湯もと元箱根へ行道も東海道なり
しまや頃り石像あまた有り
早川谷所に出て象が鼻にかゝる 早川より
早川の断きより
三枚橋のかたを流るゝ川なり水源箱根の湖なりとも

出る本覚底倉堂なし塔の沢湯本より出る
この所へ流る又川下と早川尻といふ盛衰記に
頼朝公三百騎にて平して早川尻に陣とられ
ゐ又早川も岸に陣場にいりし湯本の方より
歓山を翻し中より見ゆ此しきた大事なりと
中に後に其より石橋と云ふ所に陣とられ
其の又文永久の乱小田原發合戦中将範を小田原家
胡時楯補へ源家へ下りこの所より川中に宿え
乱元弘の乱にも参議平成補相模右大の所まで
斬し又太平記にあり

本街道畑リ
滝坂道
湯本
早雲寺
三枚橋
七湯分レ道
湯本在五丁

石ク汁山
早川湖水ヨリ出ル
早川ノ下ヲ早川尻ト云
早川村

當山四十九名所

宮城山　冠ヶ嶽　駒ヶ嶽　寶藏嵩

明神嶽　藥師嶽　臺ヶ嶽　屛風嵩

二子山　文庫山　地獄山　死出山

挑灯山　佛供山　蛭子山　鮹屽

諸仏川　琴川　三途川　吾妻川

不動石　踏石　目代木　伽羅木

矢立杉　浦島櫻　鶫の杉　錫杖木

古杉　室の律　相摸律　懺悔津

駿河津　白山の津　花川の津　伊豆の津

枯律の池　血の池　銚子池　精進池

阿字池　蓑池　蜂ヶ池　蕭の池

相摸國古傳曰坂東といふハ箱根より東の地をいふなりは

當國まづ其東よりあつれる事一なれハ坂上の國といふ義
まろかの文字一字を省きて相摸といふなるよし國書に
又箱根山ハ中古以来の說にして往古ハ足柄山を通じたる足
柄の御坂かと歌にも讀まれハ此坂の上といふ說もやあ
らんと思ひしに加藤氏の說を考を按ずるに東方の事ハ
上下をもって分つ　謂所上毛　下毛　上總　下總也之西方の国をば
前後をもって分つ　肥前　肥後　筑前　筑後是也さるをば
相摸武藏ハ旧一國にて牟佐といひしを上下にわかち
牟佐上牟佐下といひしが又佐加三て相摸の字を
あつるハ人多く論らふるなれどこハりし佐賀武と
いへるが古の唱の正しきにて佐加三とハ後世の唱なれハ
おのづ其相の字の音のひびきうづかに略し摸の音をミミ
略きしなるよし鈴木氏の地名音略用例にみゆ

二子山
芦ノ湯
火燈山
滝津瀬に
おしなかさるゝ
鹿の子かな
完來
畑宿

4年10月

従江戸筥根湯本マテノ道法リ

品川 川崎へ 二里半
川崎 神奈川へ 二里半
神奈川 程ヶ谷へ 一り九丁
程ヶ谷 戸塚へ 二里九丁
戸塚 藤澤へ 一里三十丁
藤澤 平ツカへ 三里半
大磯 小田原へ 四里
小田原 三枚橋へ 一り半
湯本

筥根七湯栞一之巻終

従江戸筥根湯本マテノ道法リ

品川 川崎へ 二里半　川崎 神奈川へ 二里半　神奈川 程ヶ谷へ 一リ九丁

程ヶ谷 戸塚へ 二里九丁　戸塚 藤澤へ 一里三十丁　藤澤 平ツカへ 三里半

平塚 大礒へ 二十六丁　大礒 小田原へ 四里　小田原 三枚橋へ 一リ半

三枚橋 湯本へ 廿丁程　湯本

筥根七湯栞一之巻終